曲阜碑刻調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2021-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牛, 瀟 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21366

《調査報告》

曲阜碑刻調査報告

牛　瀟

はじめに

2019年8月20日から29日にかけて、筆者は明治大学大学院生研究調査プログラムで中国山東省曲阜市とその周辺にある儒教遺跡を調査した。曲阜は、孔子の故郷と言われており、市内外に多くの墓碑や数千種の碑刻が散在している。今回の調査の主たる目的は、中国元代の儒教祭祀に関する博士論文の執筆に必要な碑刻資料を実見することにあった。また、8月2日～9月2日に曲阜市の孔子研究院で開催される「文廟釈奠研究の回顧と展望」のシリーズの講座に参加し、儒教祭祀研究の動向や曲阜の碑刻整理の最新状況を把握することも目的の一つであった。東京成田空港から北京へ移動した後、京滬高速鉄道に乗り、山東省内の徳州駅、済南駅を経て曲阜駅に到着。北京からはおよそ2時間かかった。本報告は、儒教の本廟である曲阜市の元代の碑刻を中心とする状況や碑刻調査についてである。

調査内容

8月21日午前に曲阜市中心の鼓楼街に到着。時間があまりなかったため、まず泗水を経て市城の北にある洙泗書院へ向かった。書院はちょうど補修工事が行われていた。書院の主要な建築物は孔子を祀る大成殿である。大正殿の前には元代「創建洙泗書院之記」（1338年）があった。それは元代の儒学学校として洙泗書院が建てられた経緯を記載している記念碑であり、碑陰には当時の書院院長や学正、教諭などの人々の名前が刻まれている。その隣には明代に建てられた「重建書院記碑」（1652年）が立っており、その碑陰にも題名があるが、元代碑文の書き方とは全く異なっている。碑刻を実見することの必要性を感じた。

図1　洙泗書院

その後、曲阜市南の公安局前にある舞雩壇へ向かった。舞雩壇とは、曲阜魯国故城の郊祀遺跡であり、その外観は巨大な土の丘となっている。地元の人に尋ねたところ、元々そこにあった碑刻はすでに曲阜の漢魏碑刻博物館へ移動されたことが分かった。舞雩壇の近くには沂河が流れて

いる。

8月22日の午前中に孔子研究院の房偉先生を訪問した。房先生は、曲阜碑刻を整理している孔子研究院の楊朝明先生とそのチームのことや、『曲阜儒家碑刻文献輯録』（共4輯、斉魯書社、2015年）が出版されたことを詳細に説明してくれた。房先生の話によると、『曲阜儒家碑刻文献輯録』は駱承烈主編『石頭上的儒家文献—曲阜碑文録』（斉魯書社、2001年）の誤読を修正し、注釈を増やしたものである。その後、曲阜市中心にある孔子廟へ移動した。

図2　曲阜孔廟の大成殿

現在の孔子廟は、宋の真宗が拡大修理した後のものである。東、中、西の三路に分けられていて、中路には順次、欞星門、大中門、奎文閣、十三碑亭、大成門、杏壇、大成殿、寝殿等が続く。中路の奎文閣と十三碑亭、及び西路の西斎宿に最も多くの碑刻が分布している。

図3　十三碑亭

十三碑亭院には、皇帝の御製碑文を保護するため、金代から清代までに十三棟の碑亭が建てられ、南北二列で並んでいる。南の列の東から四番目と五番目の亭は元碑亭である。四番目の亭に、著名なパスパ文字モンゴル聖旨碑（1294年）、「勅修曲阜宣聖廟碑」（1339年）、「加封孔子制詔碑」（1307年）（図4）がある。亀趺と龍首の形式で作られており、モンゴル皇帝が孔子に「大成至聖文宣王」を加封した聖旨碑刻と孔子廟修理の記念碑である。五番目の亭内の西側に1308年「懿旨釈奠祝文碑」と1327年「皇妹大長公主降香碑」が並んでおり、それらは魯国大長公主サンガラギが孔子を祭祀した、いわゆる女性祭孔の記念碑である。東から六番目の亭にも元碑がある。

図4　十三碑亭第四亭の元代碑刻

図5　十三碑亭西南部、奎文閣後

また、十三碑亭院の外にも多くの碑刻がある。筆者が実見したところ、奎文閣の後ろの空間に一列の碑刻があり（図5）、それらは「学田地畝碑」（1294年）、「孔顔孟三氏免糧碑」（1298年）等であった。院の西南部には元代の代祀碑等があるが、補修工事中のために公開していない。東南部にも元代の国家祭祀碑刻と孔子廟修理の碑刻が多くあり、碑文もはっきり読める。西北部にも二基の元代碑刻が壁に嵌め込まれている。十三碑亭院には元代碑刻が合わせて30基ぐらいある。その他、孔廟西路の西斎宿には元代官僚や知識人の題記碑が50余基、東路の崇聖祠、孔宅故井などにも碑刻がある。

8 月 23 日は市内バスで曲阜郊外の防山と泗水の間の梁公林村の中にある孔子父母の墓地や祠堂の梁公林へ行った。梁公林には甬道、祠堂と墓園がある。甬道の両側に石柱、石獣、石人が並んでいる。管理者に尋ねると、元代の文物であるとのことであった。また、樹齢千八百年の古木について熱心に説明してくれた。墓園に向かう東掖門の壁には「修理曲阜啓聖林廟碑」(1336 年)が嵌め込まれていて、碑文がはっきり読める。それは元代に孔子父母が「啓聖王」に加封された後、啓聖王林となった梁公林を孔子の子孫が修理した際の記念碑である。墓園の中には孔子父母の墓碑があり、これはモンゴル政権下の 1244 年に益津の高翾が書いた篆書「聖考斉国公墓」である。その隣には孔子の兄の伯尼墓碑（1407 年）がある。墓碑の前に花瓶、香炉、菊の花が置かれている。

午後は鼓楼街から三輪車で東に向かい、村や畑を経て少昊陵へ行った。三輪車を運転するおじいさんが村の状況を話してくれた。畑の中でちょうどトウモロコシを収穫していて、その後は畑を整えて小麦を植えるとのことであった。ピーナッツ、ザクロ、芋、高粱、クルミ、トウゴマ等も植えられていた。そのおじいさんが道沿いの水の施設についても説明してくれた。

少昊陵の近くには曲阜のもとの城「旧県」という村があり、そこからは魯国故城が見える。少昊陵の中には明、清の碑刻が特に多くあり、大きな四角形の黄帝の墓もある。その隣には北宋大中祥符年間に建てられた景霊宮遺跡があり、今は大きな石だけが残されている。また、寿丘というところには、北宋宣和年間に立てた高さ約 17 メートルの「万人愁」碑（図 6 左）と「慶寿」碑（図 6 右）があり、「慶寿」碑の字は 1266 年に燕山道人によって書かれた。

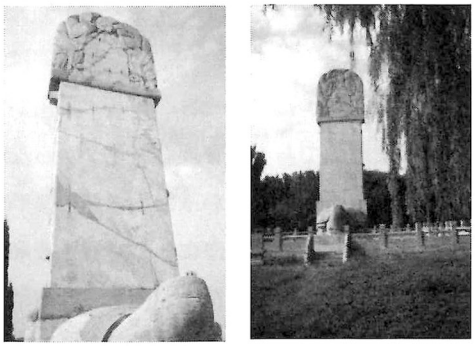

図 6　寿丘「万人愁」碑と「慶寿」碑

8 月 24 日は孔子子孫の家である孔府へ行った。孔府の二つ目の門には、「闕里廟学記碑」(1299 年）がある。そこにはまた、著名な「朱元璋与孔克堅孔希学対話碑」(1368 年）があり、非常によく保存されている。三つ目の門の前の壁には、趙孟頫の書道碑等の碑刻が一列で嵌め込まれているが、字の彫りが浅くて読みにくい。また、孔府の後に漢魏碑刻陳列館があり、碑刻の多くは漢から魏晋までのものであるが、宋元の展覧室もある。趙孟頫が書いた墓碑、曲阜県の官衙の沿革等に関する元碑は 4 基あり、非常によく保存されている。

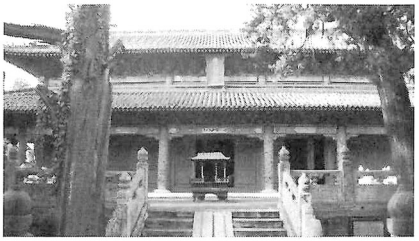
図7　顔子廟復聖殿

午後は曲阜市城内の顔廟へ行った。顔廟の帰仁門にも益津高翿が書いた「顔子廟」碑（1244年）がある。仰聖門の前に二棟の碑亭があり、西の碑亭には「保護顔廟禁約榜碑」（1311年、碑陰は1312年）がある。正殿の復聖殿の前には3基の元碑があり、それらは「保護顔廟聖旨禁約碑」（1307年、碑陰は1312年）、「追封兗国復聖公及其夫人制碑」（1335年）、「賜先師兗国復聖公新廟碑」（1334年）である。また、正殿の西には顔子父母を祀る杞国公殿があり、その前に「加封顔子父母制詞碑」（1334年）がある。それらの碑文はいずれも文字がはっきりと読める。

8月25日は車で、顔子と子孫の家族墓地である東顔林へ寄った後、曲阜市の東南にある尼山へ行った。東顔林は普段開放していないが、管理者に訪問の趣旨を話したところ、許可を得ることができた。中には明代1547年の顔子と二世祖、三世祖の墓碑があり、他はほとんどが現代の墓碑である。尼山には孔子廟と尼山書院がある。孔廟の大成殿前には4基の碑刻がある。元の碑刻は2基あり、「尼山書院碑」（1339年）と「尼山大成殿増塑四公配享記碑」（1354年）である。修理した時の人々の題名があり、いずれも字ははっきりと読める。毓聖侯殿前、尼山書院の門前と書院の中にも各1基ずつ元碑がある。尼山から出た後、車で顔母庄村中の顔母祠へ行った。顔母祠は小さな祠廟である。管理者が見つからなかったために中には入れなかったが、倒れている明代の碑刻があることが分かった。

8月26日は曲阜の南にある鄒城孟子廟へ行った。途中、一般開放はしていないが、ちょうど補修工事中のため入ることができた孟子故里と孟母林に寄った。孟子故里では正殿と授業を行うための場所を確認した。孟母林の孟母墓の前には、鄒県県尹司居敬や著名な朱子学者の張瓆等が孟母墓を建てた記念碑である「孟母墓碑」（1296年）があるが、字は浅くて読みにくい。その後、孟廟に着いた。孟廟の碑刻は非常によく保存されている。特に、その東にある孟子父母を祀る啓聖殿前の甬道の両側（図8）には元代碑刻が7基、また、致厳堂の壁にも多くの碑が嵌め込まれていて、元碑も1基ある。孟廟の隣には孟府があり、その中には明、清の碑刻が多くある。また、鄒城には孟母断機堂や子思書院の大きな建築物があるが、平日は閉館していて管理者がおらず、入れなかった。その後曲阜に戻り、孔子家族墓地のある孔林へ行った。そこは非常に広くて、10萬余基の宋、元、明、清など歴代の墓碑があると言われており、草むらには石儀、石馬などがころがっていた。孔子墓碑の前にも益津の高翿が書いた「宣聖墓」、「泗水侯」墓碑、「沂国述聖公」墓碑（1244年）が立っている。その後、明墓

図8　孟子廟啓聖殿甬道の碑刻

群のところに散在している数基の元の墓碑を見つけた。個人で整理するには大変な苦労が伴うと考えるが、孔林には華北の家族変遷や婚姻に関する多くの史料が残されていると感じた。

8月27日は曲阜の孔子研究院で開催している第五回「文廟釈奠研究の回顧と展望」に参加し、水口拓寿先生（武蔵大学）の「祭孔的伝入与在地化—以日本『古今著聞集』為例」報告を聞いた。水口先生は国立国会図書館所蔵の鎌倉時代の橘成季『古今著聞集』の記載を用い、大学寮が天照大神の来臨を理由として、祭祀の中で孔子へ祀る「三牲」（大鹿、小鹿、豕）制度を廃止したことから、日本に釈奠礼儀制度を導入した後に日本の文化や仏教の影響により平安時代末期や鎌倉時代に変化が起きたこと、及び橘成季の世界観等について報告された。午後には水口先生、房偉先生、碑刻を研究している陳霞先生、及び孔子研究院の先生方の座談会に参加し、儒教、釈奠礼儀の研究、現在の孔子廟釈奠礼の発展状況、及び碑刻研究の最新状況を学んだ。

8月28日は再び水口先生と房偉先生と一緒に孔廟へ向かった。途中、両先生から中国の南京等各地の孔廟や台湾、韓国の孔廟と儒教研究の話を伺うことができた。孔廟の大成殿で毎日行われている釈奠礼の儀式や、孔門七十二弟子の牌位を一つ一つ観覧することは、さながら儒教史を見るようであった。また、孔廟の建築や祭祀の方位などについても多くを学ぶことができ、深く感銘を受けた。午後は、陳霞先生が薦めてくれた曲阜師範大学の隣にある今古譚書店を訪れた。そこは山東省志、档案、碑刻資料など、曲阜師範大学が必要としている教材を多く収集している古本屋である。店員が外出中のため話を聞くことはできなかったが、書店内には多くの書画が掛かっていて、拓本や辞書なども数多く並んでいた。また、店では古典文化講座が開かれており、曲阜には文物や歴史史料に関心を持つ人が非常に多くいると感じた。

図9　馬車と曲阜師範学校旧址

おわりに

曲阜での8日間で、130余基の碑刻について写真撮影や筆写をすることができた。なお、碑刻に見られた人名や情報は、これまで紙の史料で見てきたものとは全く異なる状況であると分かってきた。元人の著述でよく見られる著名な儒者の名前が見えず、それとは逆に、身分が明確に分かっていない高翺等の名前が曲阜には多く残されている。これについては、多くの研究課題が残されているのである。曲阜では多くの儒教史を研究している先生方から直接研究状況を聞くことができ、一緒に多くの古跡や文物を訪ねることもでき、とても貴重な機会を得た。先生方の熱心なご指導に感謝するとともに現地調査の重要性を再認識した。